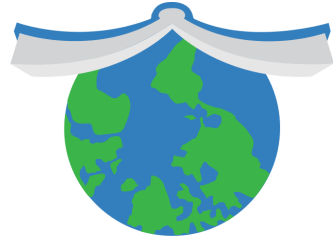


ゾーシーのお姉さんが言ったこと

たこと



Nina Orange
Wiehan de Jager
Kohei Usaka
4
日本語 ja



Global Storybooks

globalstorybooks.net

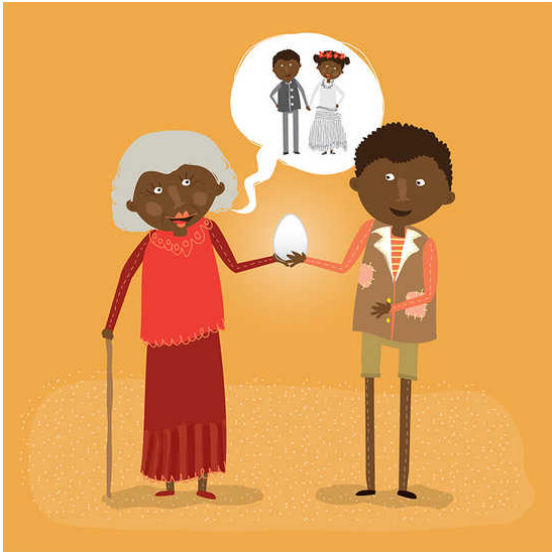
ゾーシーのお姉さんが言ったこと

Nina Orange
Wiehan de Jager
Kohei Usaka



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 3.0 International License.
<https://creativecommons.org/licenses/by/3.0>





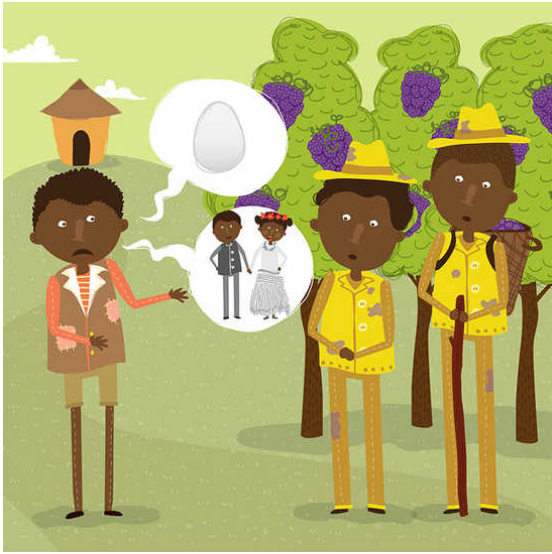
ある日の朝早く、ブーシーのおばあちゃんはブーシーにお遣いを頼みました。「ブーシー、この卵をお父さんとお母さんに届けてくれないかい？ 二人はこの卵で、お前のお姉ちゃんのために大きなケーキを作りたいんだ。」



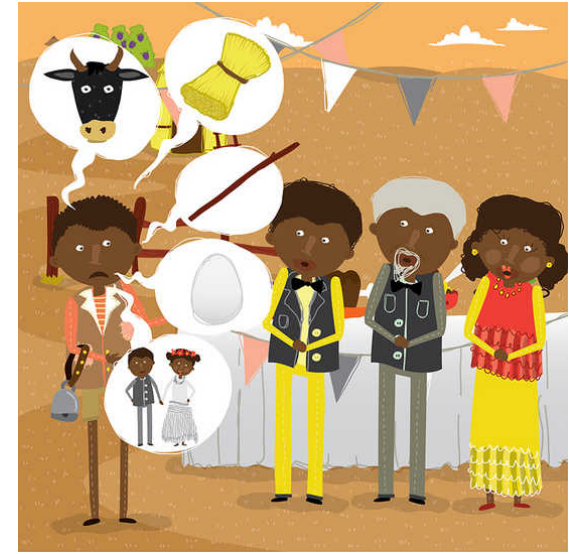
お父さんとお母さんのところへ行くと道の途中、フーシーは果物狩りをしている二人の少年に出会いました。少年はフーシーから卵を取り上げ、木に向かって投げつけてしまいました。卵は割れてしまいました。



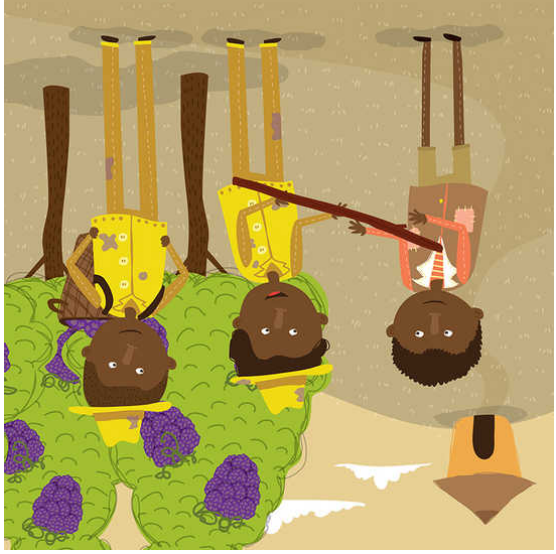
フーシーのお姉さんは少しの間考えて、それから言いました。「私の弟、フーシー。私はほんとは贈り物のことは気にしてないわ。それどころかケーキのことはさえ気にしてない! みんなが揃って、私はそれだけで嬉しいわ。さあ、カッコいい服に着替えて、今日をお祝いしましょう!」そして、フーシーはその通りにしました。



「何てことしてくれるんだ! 」と言って、ブーシーは泣き出しました。「これはケーキのための卵なんだ。そのケーキは僕のお姉ちゃんの結婚式のためのものなんだ。ウェディングケーキが無かったら、お姉ちゃん何て言うかなあ……」



「どうしよう。」ブーシーは泣き出してしまいました。「大工が藁のお詫びにくれた贈り物の牛は逃げちゃった。大工は、果物狩りの少年からもらったステッキを折ったお詫びに藁をくれたんだ。果物狩りは、ケーキに使う卵を割ったお詫びにステッキをくれたんだ。そのケーキは結婚式のためのものだったんだ。今、卵も、ケーキも、それから贈り物も無いよ……」



少年たちはゾーシーをからかったことを謝り、「僕たちはクーキを作ることはできませんけど、代わりにこのスツキを君のお姉さんにやるよ。」と言い、スツキを渡ししました。ゾーシーは再び歩き始めました。



けれど牛は、夕食の時間になると農家おじさんのもとへ帰ってしまいました。そしてゾーシーは道に迷ってしまいました。ゾーシーがお姉さんのところに着いたのはだいぶ遅かったので、とくにパーナーは始まっていました。



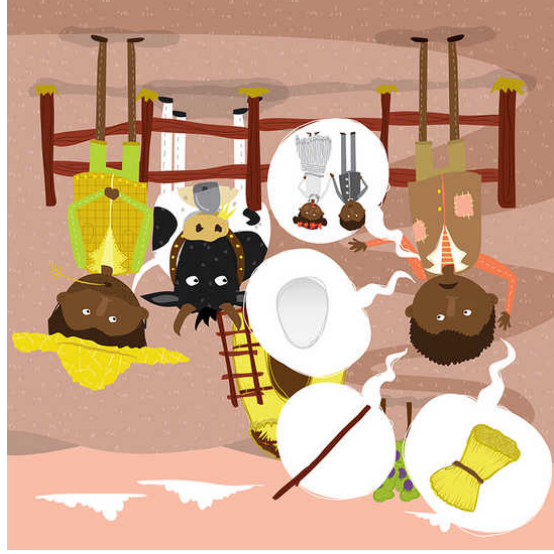
道の途中、ブーシーは家を建てている二人の男に出会いました。男の人はブーシーに「その丈夫そうな木を使ってもいいかな? 」と聞きました。しかしそのステッキは家を建てられるほど十分に強くはなく、折れてしまいました。



牛は食いしん坊を謝りました。農家おじさんは、牛がお姉さんへの贈り物としてブーシーに付いて行くことに賛成しました。そしてまたブーシーは歩き始めました。



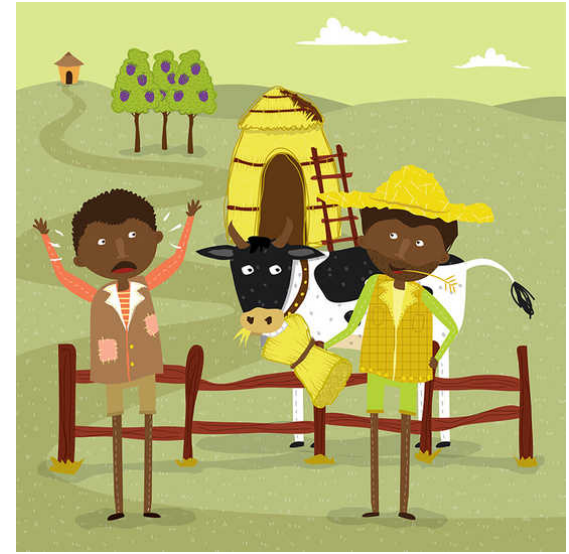
「何てことしてくれるんだ!」とゾーシーは泣き出しました。「そのヌツキはお姉ちゃんへの贈り物なんだ。果物狩りの少年が、ヌツキに使う卵を割ったお詫びにくれたんだ。そのヌツキはお姉ちゃんのウエイディングケーキだったんだ。卵も、ヌツキも、それから贈り物も無い。お姉ちゃん何て言うだろう……!」



「何てことしてくれるんだ!」とゾーシーは泣き出しました。「あの藁はお姉ちゃんへの贈り物だったヌツキを折ったお詫びにくれたんだ。果物狩りの少年は、お姉ちゃんへのヌツキに使う卵を割ったお詫びにヌツキをくれたんだ。そのヌツキは、お姉ちゃんの結婚式のためのものだったんだ。そして今、卵も、ヌツキも、そして贈り物も無い。お姉ちゃん何て言うのかなあ……!」



大工は、「僕らはケーキを作れないけど、代わりにお姉さんにこの藁をあげよう。」と言って、ステッキを折ったことを謝りました。そしてブーシーはまた歩き始めました。



道の途中、ブーシーは農家おじさんと牛に出会いました。「何て美味しそうな藁なんだ、少しかじっていいかな？」と牛は尋ねました。しかし藁はとてもおいしく、なんと牛は藁を全部たいらげてしまいました。